

## 木を使った造形あそびに挑戦してみよう

幼児教育学科 教授 重村 幹夫

【日 時】2022年8月5日（金）10：00～11：30

【定 員】30名

【参加人数】10組25名

「造形遊び」とは、昭和52年小学校学習指導要領「図画工作」において、「造形的な遊び」として、低学年に始めて導入されたものです。導入の目的は、「遊びの特性」としての、自発性、柔軟性、想像性、行為性を「造形活動」に保証することであるとも言われています。その後、「造形遊び」と改称されるとともに、小学校全学年に広げられ、「絵や立体、工作」とともに、「図画工作」の主要な学習内容となりました。

このような「造形遊び」は、導入されて45年もの歳月が流れたのにもかかわらず、現場における実践割合が低いという事実も聞きます。その理由としては「造形遊び」がいまだに曖昧な印象があることや、その評価が難しいと言った現場の思いも影響しているようです。

「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」に「造形遊び」の記述はありませんが、保育の現場で実践されて来た内容と重なるとも考えられ、近年保育の現

場でも、取り上げられています。教科である「図画工作」と区別するため、一般に「造形あそび」と表記されます。

「造形あそび」というと、あたかも遊具を制作して、それで遊ぶ活動であるとか、保育の活動が主に「遊び」を通して行われていることから、保育における造形的な活動を全て「造形あそび」であるとか思われがちです。これらはよくある誤解です。

「造形あそび」の最も明確な特徴は、最初にテーマ（主題）が決まっていない点にあります。一般的に、イメージされる造形活動は「とんぼのけん玉を作しましょう」とか「七夕の飾りを作しましょう」などと、最初にテーマを示し、それに従って用意された材料や道具で「作品」を作り完成させることが多いと思います。それに対し「造形あそび」は、素材や材料、技法や行為等が示されますが、テーマは決まっていません。素材や材料、技法や行為がなされる中で、「作品」が出来上がり、結果としてテーマが決まってくる場合もあれば、いつまでも作り、壊しといった活動を続け、終わりが無い場合も見られます。

「幼稚園教育要領」には、「活動を豊かにすることは、いろいろなことをできるようにすることと同じではない。重要なのは、活動の過程で幼児自身がどれだけ遊び、充実感や満足感を得ているかであり、活動の結果どれだけのことができるようになったか、何ができたかだけを捉えてはならない」と記されています。これを造形活動に当てはめて考えると、造形活動の結果として「作品」が必ずしも完成しなくても良いと捉えることができるのではないのでしょうか。重要なことは主体的な活動の過程で子どもが学ぶことにあります。

私は、2016年から坂井市保育研究会講師として、保育現場で子どもたちや現場の保育者に出前授業を行うことになりました。丁度そのころ「造形遊び」



について調べていましたので、その機会をお借りして子どもたちに実践してみました。最初は、自然素材を使った造形活動を行ってほしいとのことで、本学学内フェンスに自生した木の枝を当時の用務員さんに切ってもらい用意しました。初めての実践で不安もありましたが、その時のことは、よく覚えています。特に印象深かったのは4人の男児のグループです。彼らは何かを話し合い、材料を手にとると床に並べ始めました。最初は、サークル状でしたが、次々と形を変えながら協力して並べ替え、積み上げていました。驚いたのは彼らの表情です。それは真剣そのものでした。この時の経験を通して、私が子どもを見る目は変わりました。それは、彼らがまぎれもない「創造者」であるということです。それ以後7年間にわたって様々な保育現場で出前授業を行ってきました。材料や技法を変えながら様々な「造形あそび」を実践してきました。常に主体的に集中して参加してくれる子どもたちもいますが、テーマが決まっていないという点で最初は戸惑う子どもたちも見られます。

今回の実践では、木材を中心として、竹や紐等様々な廃材を用意しました。接着には、グルーガンやボンドを用います。必要に応じてのこぎりで切れるようにしました。全体として、子どもたちは極めて集中して取り組んでいたと思います。アンケート結果も概ね好評でした。90分行いましたが、時間が足りないという意見もありました。しかし、若干ですが最初にテーマが決まっていない事で、抵抗感を感じた子どももいたようです。今後も、子どもたちの感性や創造性を豊かにする造形活動に取り組んでいきたいと思います。

